連載企画

# ボランティアと私

## ー何かを求めてー

## ◇多摩市「障がい者青年教室」◇

法学部3年　飯村麻実さん

多摩市が主催するボランティア事業の一つに「障がい者青年教室ボランティア」がある。心身に障害のある18歳以上の青年を対象に、月に1回、多摩市の永山公民館で開いている日曜教室で、ボランティアの学生たちが創作活動やレクレーションなどに参加、一緒になって楽しみながら活動している。

### 月に1回、創作や調理に参加

社会福祉サークル「青い鳥」に所属する法学部3年の飯村麻実さん（桐蔭学園高校出身）は、その「青年教室」でボランティア活動するメンバーのひとりだ。月に1回、午前10時から午後3時ごろまで、サークル仲間とともに参加している。

教室に参加する障害のある人は、30代から40代が中心で、ほとんどの人に知的ハンディがある。障害の種類や程度もさまざまで、飯村さんは、そういう参加者を親しみ込めて「青年さん」と呼ぶ。

「青年さんのなかには、活動中に流している音楽を勝手に変えてしまったり、トイレにものを流してしまったりする人もいます。でも皆さんとてもフレンドリーなんです。お話好きな青年さんとは、好きなアイドルの話で盛り上がったりします」

「青年教室」で行われている活動はさまざまだ。工作などの創作活動や調理、それに体育館でスポーツ大会などが行われている。青年さんの活動を手助けし、人数の確認や移動時の誘導などが飯村さんたちボランティアの仕事だ。

季節ごとにイベントがあり、昨年秋には多摩動物公園の遠足に参加した。「とてもおしゃべり好き」という青年さんとの遠足に、飯村さんは「動物の名前にとても詳しくて、私が知らない動物の名前をたくさん教えてくださいました。雑談しながら園内を回り、友人と遊びにきているようでした」と笑う。

### ボランティア同士の交流も

「青年教室」には、「青い鳥」のメンバーだけでなく、一般の人もボランティアとして参加しており、ボランティア同士の交流も盛んだ。蝋絵（ろうえ）の製作中、青年さんがなかなか絵を描いてくれず困ったときがあった。そんなとき、年配のボランティアさんが「青年さんに筆を持ってもらって、ボランティアが画用紙を持って動かしてあげるといいよ」とアドバイスをくれた。「青年さんの様子を見ながら、青年さんのペースで進めていくことが大事なんだと学びました」と飯村さん。

「青年教室」では昨年から青年さんが半数ずつの隔月参加となり、1回の活動人数が約20人と少なくなった。「少人数制になったことで、青年さん、ボランティアともに余裕をもって活動できるようになりました」という。青年さんとの距離も縮まり、「いつもはうまくいかないことがあるとすぐに拗ねてしまう青年さんがとても作業に集中しているのを見て驚いた」こともあるという。

飯村さんが「青い鳥」に入会したのは、1年生の後期。「はじめは違うサークルに入っていたん

ですが、足が遠のいてしまいました。高校生のときに、障害者の通所施設でボランティアをした経験があったので、青い鳥に入ることを決めました」という。今では役員を務めるなど、サークル活動に積極的に取り組んでいる。

## 「楽しみながらやるのが大事」

「もともと人見知りをする性格」という飯村さん。「青年さんと気軽に話せるようになったのは本当に最近」だそうだ。以前は、「自分は何をすべきだろうと、自分を主体にものを考えていた」が、今では「青年さんたちがどうしたいのか、どうして欲しいのか、青年さんの目線になって考えられるようになった」という。

「青年さんの表情や行動から気持ちを察することが大切です」と青年さんと接する秘訣を教えてくれた。「参加者が楽しく活動できるように、作業を手伝いながらおしゃべりをするのも大事なボランティアのひとつです」と話す。

以前は無口だったが、最近、サークル仲間から「よくしゃべるようになったね」と言われたそうだ。「とにかく楽しみながらやることが大事だと思います。そして能動的に青年さんたちに接していくことで、意義のある活動にしていきたいです」とボランティアへの思いを笑顔で語ってくれた。

（学生記者　廣瀬功一＝文学部４年）

飯村麻実さん